

春日信仰における神鹿とその造形

重富 滋子

これまでに知られているように、春日信仰は熊野・山王信仰とともに、垂迹思想にもとづいた多様な造形作品を生み出してきた。種々の曼荼羅や神影等の絵画・本地仏・神像等の彫像、あるいは懸仏・神宝類等の工芸品があり、それらの中には優れた作品も少なくない。中でも鹿曼荼羅をはじめとするいわゆる神鹿を特徴づけるものとして、格別注目すべきものと云えよう。

この神鹿は、春日社にあって古来神使と見なされてきたもので、今日、奈良公園に保護されて悠然と遊ぶ鹿も、その背景に神使としての永い歴史をもち、春日社を象徴してきたのである。こうした神鹿を対象とした造形作品について考える場合、まずその成立の事情、さらには付与された性格について明らかにしておくことが必要と思われる。本稿ではこの神鹿と春日社の結びつきの始源を考察するとともに、神使としての役割を担った鹿が作品にどのような取り入れられ、展開をしていったかを具体的に作品に触れつつながめてみることにしたい。

一 神鹿の成立と変遷

(一)

鹿が春日信仰と結びついた理由として、春日四座の第一殿、武甕槌神が鹿島より鹿に乗って御蓋山に影向した事があげられる。

春日大社所藏『古社記』に記載されている時風記文に、

「自常陸国御住处、移三笠山之間、以鹿為御馬、以柿木枝為鞭、御出。先、神護景雲元年杓六月廿一日、来着伊賀国名張郡夏身郷。一瀬河沐浴御坐之間、以鞭為驗、件河辺立給、則成樹生付了。自其立渡坐回国薦生山。数月居御。其時、時風・秀行等、焼栗各一給宣云。迄至汝等子孫、无断絶、可我仕者。其栗殖必可生付。仍随仰殖。即生付了。自之始白中臣殖栗道。」

同年十二月七日、大和国城上郡安倍山御座。同二年戊申正月九日、同国添上郡三笠山御跡御。——以下略——

と武甕槌神が御蓋山に影向した様子が詳細に述べられている。これにより、鹿が武甕槌神の乗り物に召されたと考えられていた事がわかる。さて、この武甕槌神と鹿の結びつきはどのようなようにして成立したのであろうか。

『古事記』によれば、天孫降臨の条に降臨にそなえ地上を平定させるため、天照大神が武甕槌神を召す場面がある。

「於是天照大神御神詔之、亦遣曷神者吉。爾思金神及諸神白之、坐天安河河上之天石屋、名伊都之尾羽張神、是可遣。伊都二。若亦非此神者、其神之子、建御雷之男神、此庇遣。且其天尾羽張神者、逆塞上天安河之水面、塞道居故、他神不得行。故、别遣天迦久神可問。故爾使天迦久神、問天尾羽張神之時答日、恐之。仕奉。然於此道者、僕子、建御雷神而遣。(傍点は引用者による)」

ここに武甕槌神を仰えに行く天迦久神なる神が出てくる。武甕槌神の父天尾羽張神が、天安河を塞ぎとめて上流に水をたたえ道を塞いでいるため、他の神では通る事ができず、特別に天迦久神を送る(3)とある。何故、天迦久神でなくてはならなかったのだろうか。

倉野憲司氏によると、父神の天尾羽張神は名義未詳であるが、武甕槌神は元來刀劍の神であり雷神でもある。又、天迦久神の迦久は鹿尾の事であり、鹿神であるうとしてゐる。又氏は、天尾羽張神が塞ぎとめていた水は、焼いた刀劍を冷やすために用いられ、鍛冶に使う鑪が鹿の皮で作られていたために、鹿神が使いになつたのではないかと考へてゐる。そして、『古事記』のこの条は鍛冶によつて、刀劍が作られた事と密接な關係をもつてゐると述べてゐる。⁴

かように、武甕槌神と鹿の關係は鹿島社以前に見られるのである。その上この刀劍鍛冶の關係は鹿島においても見られる。『常陸國風土記』に、

「郡東二三里 高松濱 大海之流差砂貝 積成^三高丘 松林自生
椎柴交雜 既如^三山野^二東南 松下出泉 可^二八九步^一 清淨大好
慶雲元年 國司姪女朝臣 率^二鍛佐備大麻呂等^一 採^三若松濱之鐵^二
以造^レ劍之 自^レ此以南 至^三輕野里若松濱^二之間 可^三卅余里^一 此
皆松山 伏沓伏神 每^レ年堀之 其若松浦 既 常陸下總二國之
界 安是湖之所^レ有 沙鐵造^レ劍大利 然爲^三香島之神山^一 不^レ得
輒入 伐^レ松穿^レ鐵也」

とあり、鹿島の地において、周田八、九歩の清い水をたたえた泉と燃料の松のある山が三十余里続き、刀劍に適した良質の砂鉄が産出したことがわかる。又、同じ『常陸國風土記』の信太郡の条に

「風俗諺云 葦原鹿 其味若^レ爛 喫^三山突^二矣 二國^{常陸}總也
大獵 無^レ可^三絶盡^二也」

とあり、多珂郡にもかなりの数の鹿がいた事が記載され、古來常陸國に多くの鹿の群棲があつたようである。このように刀劍鍛冶に適した地と鑪の材料である鹿皮にも恵まれていた。そして、これらの

地は鹿島の神山として大切に保護され、みだりに木を伐つたり、砂鉄を掘る事は禁じられていたのである。当然、鑪の材料となる鹿皮、もしくは鹿そのものが何らかの形で保護されていたと考へられるよう。

このように、武甕槌神の特質を探っていくと、刀劍鍛冶に行きつくように思われる。鹿島神宮に神劍として奉安されている⁵神靈劍の長大さをみるに、二、二五メートルの直刀を奈良時代に作り得た事は、当時鹿島の地に刀劍鍛冶の技術が育つていた事実を物語る。その背景には当然、前述のような地の利があつたと考へられる。

これらの事実を綜合してみると、鹿島において武甕槌神は刀劍鍛冶の神であり、そこから派生して武器の神、武神へと発展したと思われる。そして、武甕槌神と鹿の結びつきは鍛冶の鑪に起源があるのではないだろうか。

(二)

さて、ここでは春日社における神々と鹿との結びつきについて述べたい。縁起等によれば、その結びつきの起因としては、武甕槌神が御蓋山に影向の御乗り物として召したとだけあつて、他の神々との接触の記述はない。それでは、鹿島社にあつた武甕槌神と鹿との關係をそのまま春日社にもちこんだのであろうか。

藪田嘉一郎氏の「春日鹿曼茶羅」では、氏は武甕槌神を雷神という性格に、死靈的性格を併有した神として捉へてゐる。こうした神特有の供儀宗教において、鹿が春日神への供儀動物であつたらうと推測し、神鹿という観点から鹿曼茶羅を再生願望の象徴としてみてゐる。筆者はこの考へとやや異なる立場をとる。すなわち氏は武甕

槌神と鹿の結びつきを鹿島ではなく、春日において始まったとするが、筆者は前述のように、両者の関係をそれ以前の刀剣鍛冶におくからである。

さて、この武甕槌神との関係しかもたない鹿を、他に三柱もまします春日社において何故うけ入れたのであろうか。鹿が春日社の神使として扱われるに至る過程を考えてみたい。

まず、春日四座の神々の関係について考えてみよう。春日四座の神々は『建久御巡礼記』によると、

「一御殿 武甕槌命、常陸国鹿島御本地不空彌索

二御殿 齋主命、下総国香取御本地葉師如來

三御殿 天兒屋根命、河内国平岡御本地地藏菩薩

四御殿 姫神、又申相殿、天照太神也御本地十一面觀音

若宮 御本地十一面觀音⁽⁸⁾

となつてゐる。そもそも、藤原氏の祖神とされていたのは天兒屋根命であり、命と姫神を河内郡の枚岡に祀り、枚岡神社を創立したことは記紀、延喜式の祝詞にみられる。その中臣氏祖神である二柱の神々が、第一殿、第二殿を他の神に譲り、第三、四殿に納まつているのは何故なのであろうか。

宮地直一氏の「春日神社の研究」によると、鹿島、香取の二社はかなり古い時期から中臣氏と関係をもっていたとある。以下氏の論考に依りながら考えていきたい。

崇神天皇の御代に神託を受けた中臣氏の祖、神聞勝命の言葉によつて鹿島神が祀られた。又、景行天皇の御代三世の孫になる狭山命に神宜を下されたと『常陸国風土記』にあるのを始め、藤原鎌足も鹿島に生まれたと『大鏡』、『伊呂波字類抄』などに伝わっている。

鎌足云々の伝承の真偽はともかく、鹿島、香取の両社付近に古くから中臣の氏人達が移住して勢力を占めており、神職も同氏によつて伝承されていたのである。『古語拾遺』によれば、房総を忌部氏の植民地とし、利根の河口をはさんだ水陸の要衝の鹿島、香取の一带に中臣氏が移植された事など、中臣氏が古くから両社を崇拝していたのがわかる。

鹿島、香取両社の神威は、武神として東北の経営、蝦夷討伐もあつて益々高まつていった。このため、この両者への信仰は早くから中央で重きをなし、神部の設置、遣使造営、封戸の寄進が相次ぐようになつたのである。その中で、両者の間でも鹿島が香取の上位におかれたのは、『常陸国風土記』のような資料によつて、その成立と歴史が後世に伝えられた事によるものであろう。又、宮地氏は鹿島の方が先に中臣氏と関係を結んだのであろうとも言っている。

このように、東北経営という重大な政治問題と関わり、朝廷の信仰厚い鹿島、香取に比べると、祖神たる天兒屋根命は歴史時代にあつては格別の事跡もなく、中臣氏の祖神として祀られていた。このため、藤原氏が春日社において自らの氏神として祀る時、古くより崇拝し神威のめざましい鹿島、香取を上座にすえたのは当然である。

『新抄勅格符抄』に

「春日神社廿戸^{常陸国鹿島社奉}常陸国鹿島社奉^{元年}」

とあるのをみると、鹿島社の封戸を割いて春日社の用途にあててゐるのである。それは、鹿島社がその封戸を少しづつ割いて、東北の未社に与えていたのと同じ扱いとなり、春日社は鹿島社の未社という形になる。前述した時風記文等によると、先ず武甕槌神が御蓋山

に影向し、その後斎主命、天兒屋根命を呼び寄せたとある。⁽¹⁴⁾ これらをもて、春日社の成立における鹿島社の影祀としての性格が認められるのである。

その後、平安期に入つて桓武天皇の延暦二十年(八〇一)九月には今までの鹿島社からの封二十戸をとりやめ、その代り鹿島・香取の両社より神封の物を割いてその祭料にあてる事となつた。

それによると、

「調布五百端 香取の封から二百端、鹿島のそれから三百端

庸布三百端 商 延喜式による鹿島封から

布六百端 麻六

百斤

紙 六百張 香取の封から⁽¹⁵⁾

とあり、鹿島一社から香取社と共に祭神の本祠たる権限を分割するに至っている。このようにして、鹿島社の影祀たる性格が徐々にうすれて行き、嘉祥三年(八五〇)に春日大社として叙位の宣命に書かれ、それまで本拠の地名が羅列されていたのが省かれるに至つた。ここにいたつてようやく、春日社はその独自性が認められたのである。

しかし、その後も鹿島を主体とすることは忘れられず『大鏡』には、

「そのかまたりのおとむまれ給へるは常陸国なれば、かしこに鹿嶋といふ所に、氏の御神をすましめたてまつり給て、その御よりいまにいたるまで、あたらしきみかど・きさき・大臣たちたまふおりは、幣の使かならずたつ。みかど奈良におはしましゝ時に、鹿嶋をとして、大和国三笠山にふりたてまつりて、『春日

明神』となづけたてまつりて、いまに藤氏の御氏神にて、以下略」⁽¹⁶⁾

とあつて、春日明神即ち鹿島神という意識がはっきりと見られる。このため官祭にあつては、此の御殿の神棚は勅使が昇ぎ、建築をみても、形式は他の三社と同じ春日造でも、正面に第一殿のみ、祝祠座を設けるなど特異な点がみられる。

これまで、宮地氏の論考にそつて述べたように、春日社は鹿島社の影祀たる性格が創立時にあり、少なくとも『大鏡』の成立した十一世紀後半頃までは、春日神といへば武甕槌神を指すという事がわかつた。こうした武甕槌神の他の三神に対する優位が、鹿を春日社の神使として扱う理由なのであろう。

三

武甕槌神によつて春日社の神使となつた鹿は具体的にどのようない扱いを受けたのであろうか。再び宮地直一氏によると、延喜から永祿頃には既に神使として崇められ、その後神鹿そのものが信仰の対象になつたとある。⁽¹⁷⁾

その延喜を初めとする平安中期は氏人たる藤原氏の権力が確立された時期である。この藤原氏の隆盛に伴い、氏の長者制が形成されていく。これは冬嗣の頃より次第に形づくられてきたものであるが、基経の時代にはほぼ制度化されていた。氏の長者は氏族の者達に絶大な支配力をもつものであつた。この長者の権限の中に氏の寺社の管理が認められている。この事實は既に九世紀後半には興福寺、春日大社の管理が制度化され、それぞれ長者に課された使命となつていた事を示している。また、外戚たる藤原氏の氏神として天

皇家の春日社への行幸も宇多法皇、一条天皇等によって行なわれ、後の白河天皇の御代には他社と共に行幸回数も多くなり、時代の風潮に伴い儀式化するに至る。

また、藤原氏の内にあつては、氏の長者の制度化をはかった基経が、元慶二年（八七八）十一月十六日春日社に参詣して以来、摂関家である藤原氏の長者は春日社へ詣でることを例とした。延喜十六年（九一六）二月には大臣忠平が春日祭に参拝し、初めて私的に神馬と走馬を奉納している。これらの例により春日社の祭は二月、十一月の上申日に行なわれるようになり、左右京の兵士及び衛府、山城の国司、郡司、近衛府、檢非違使などが動員された華やかなものであつた。それ以前の嘉祥三年（八五〇）には、官祭として扱われていたが、延喜以降春日祭は盛大なものとなつていった。しかし、勅祭が行なわれるようになって、藤原氏の氏神たる性格は崩れなかつた。その祭において、あらかじめ祭に預るべき五位以上の差文を氏長者に見せ、勅祭の時には氏は私幣を奉じるなどあくまでも氏神として崇拜していたのである。

このような春日信仰の下に神使としての鹿の崇拜も行なわれていた。鹿に出合うことは吉祥事として喜ばれ、夢でそれを見ることさえ春日神の加護と考えられた。

その様子は『中右記』、『日乗台記』等の公家の日記に見ることが出来る。中でも『春日権現験記』の第十五巻、大乘院僧正事の条は、それをよく表わしている。

「遺恨きはまりなくして脇足にかゝりながら聊まどろみ給けるが。おどろきて前にはべる頼憲と申僧に。汝がうしろの前裁に鹿一頭縁に頸をかけて。我にむかひて立とみてさめぬ。不思議のこ

となりとの給。頼憲は神明の加護なるらんとおもひて。感涙をのごふほどに。翌日の仏事。思ひのごとくとげられにけり。其時尊遍得業といふ僧おなじく菩提山に侍ける夢にも。房中を見あぐるに。あるところにたれぬの間かけたるところのあるをひきあけて見れば。そのうちに大なる鹿一頭黙然としてたてりといひけり。ふたつの事すでに符合しぬ。大明神和尚をまぼりたまひける。」⁽¹⁸⁾

一般には夢で鹿を見ることが即ち春日神の加護とされていた様がある。また宮地氏によると、この鹿への崇拜が発展して、遂に神鹿そのものが信仰の対象となり、春日詣の時最初に逢う鹿に対して、公家は車から降りて之を拝したという。そしてそれは平安中期以降の仏教の隆盛に伴つた神々の権化思想によると論及している。これについては、後に詳細に述べたいと思うが、筆者はこの神鹿への崇拜に対して少し異なる考えをもっている。

さて、春日信仰を扱う際に興福寺をさける事はできない。そしてその中にも鹿の姿が見られるのである。

『建久御巡禮記』の興福寺南円堂の条に、

「此堂ノ被ニ築壇之時、人夫之中ニ春日大明神交ラセ御坐シテ、聊有ニ御詠吟、」

補陀落ノ南ノ岸ニ堂立テ、北ノ藤波今ノ榮ユル、

補陀落山ハ八角之山也、彼ノ山ニハ藤ノ花盛ニ滋シ、此御堂ハ彼山、有様ヲ移彼ニ造二也。北ノ藤波トハ、藤氏ノ四家ノ中ニ、北家ノ脉、可レ

榮之由ヲ讀セ給、忝シ不空羂索觀音ハ左ノ肩ニ、シ、ノカハヲ服キ給ヘリ、其由ヲ被ニタリ造、春日ハ鹿ヲ使者トシ御坐シテ、鹿嶋ヨリ三笠之社ニ移ウツリ御坐ス、皆是依ニル昔ノ縁ニ事也。」⁽²⁰⁾

とあり、春日大明神自ら人夫の中に現われ、不空羂索観音を崇める形となっている。そして、春日明神と不空羂索観音の結びつきは不空羂索観音の左肩に着た鹿皮にあるとされている。

不空羂索観音は教舜の『秘鈔口決第十五不空羂索法』に、「御口に云はく、羂索とは慈悲の索なり。世間の魚網雁繩は魚鳥、目に漏るることあるも、此観音の慈悲の羂索には一切衆生漏るることなし。羂索を大千界に覆ひて修業者に奉化し。必ず悉地を興へて利益を施すの意なり。此義空しからざるが故に不空と云ふ。」

とある。羂索によつて衆生を愛護引接しようという悲願をたて、それを全うするような絶大な力をもつ観音である。その不空羂索の形像については豎泥耶鹿王の皮を以つて肩を覆うと『不空羂索陀羅尼自在王呪経卷上成就畫像頓法』に説かれている。又『補陀落海會軌』にも鹿皮の袈裟を繫け、百福もて身を莊嚴すとある。その不空羂索観音左肩の鹿皮に神鹿を結びつけたのである。

しかし、何よりも不空羂索観音と武甕槌神を結びつけたのは、共に藤原氏の守護神という性格であった。南円堂不空羂索観音は前述の『建久御巡礼記』によると、長岡右大臣内麻呂が藤原氏の繁栄を祈つて造像したものである。その後、仏殿を建立せずに内麻呂が亡くなったため、藤原冬嗣が南円堂を弘二四年（八一三）に建立し、そこにこの像を安置したのである。「藤氏本尊也」と『興福寺流記』にあるように、藤原氏の守り本尊として深く崇拜され、他氏姓の者たちには祈祷を禁じたほどである。⁽²²⁾

又、武甕槌神も前述のように春日社の主体として、藤原氏より氏神として厚く祀られていた。この両者が垂迹思想の中で結びついた

のは自然なことのよう思われる。

ただ、たとえ後世の解釈であっても、不空羂索観音と武甕槌神を結びつけたのが鹿皮とされたのは、この神鹿がいかに大きな存在であったかを物語るものと思われる。この両者の媒体としての鹿の話は、『建久御巡禮記』の他にも、保延六年（一一四〇）の『七大寺巡礼私記』にもみられ、かなり世に広まっていたものと思われる。

このように藤原末期には神鹿の存在は大きなものとなつていたのである。これ以降神鹿は信仰形態の歴史の変遷に従つて、その姿をかえていく事になる。それらについては現存する作品に触れながら話をすすめていきたい。

二 神鹿としての造形

神鹿を扱った作品といえ、先ず第一に鹿曼茶羅が思い浮かぶのであるが、その他にも絵画では鹿島立御影図、三十番神図があり、工芸品としては春日御正体、舍利塔、舍利厨子等をあげる事ができよう。また、彫刻においては他の分野と比べると現存の作品が少ないが、二、三の作品が残されている。これらの作品はすべて程度の差はあれ、影向の形をとっており、その背景には武甕槌神の御蓋山影向があることは疑いない。

（一）春日鹿曼茶羅

鹿曼茶羅はいうまでもなく春日曼茶羅の範疇に属する。春日曼茶羅は垂迹画の中でも、その数において他の山王、熊野の両曼茶羅の比ではない。それは前節で述べたように、時の権力者の氏神であつ

たからであらう。春日曼茶羅の文献上の初見は、よく知られるように『玉葉』の寿永三年（一一八四）五月の条即ち奈良から送られてきた春日社の図絵を七日間礼拝したとの記載である。ここに見られる「図絵春日御社一鋪」が果して、宮曼茶羅か他の曼茶羅かは、はっきりしないが絵図を掲げて礼拝するといった曼茶羅の性格が示されている。このことより既に藤原末期には春日曼茶羅が存在していたことがわかる。

鹿曼茶羅に関しては『春日権現験記』の第四卷普賢寺撰政事の条に、

「すべてこの殿は神慮にかなひ給けるにや。春日の宝前にては鹿御かほをねぶりけり。又世中にひろまりたる垂跡の御鉢の曼茶羅も。この御夢におがませ給たりけると申つたへたり。」⁽²⁾

とあることは、周知に属する。この伝承を信ずるとすれば、普賢寺撰政藤原基實（一一六六年没）の頃、平安末期に成立したことになる。ただ、現存する鹿曼茶羅の中に平安末期の作品は残念ながらみあたらない。現存の作品中最も古いとされるのは、陽明文庫本であり鎌倉時代の作である。

陽明文庫本⁽¹⁾は近衛家伝来であり、藤原一門の中で、代々氏神として大切に礼拝されてきたものであらう。数多くの鹿曼茶羅の中で唯一鏡を描かず、端然としてたゞずむ鹿の背に一本の神の枝を立てた鞍がのせてある。これは神の宿る所、神籬を鹿の背に安置したのであり、仏像でいえば鹿の獣座にあたる。

このように垂をつけた神の枝一本を神籬とみなす所など古様な形を伝えており、神道的な要素が強いが、上部色紙形の贅をみると和光同塵の垂迹思想が色濃くみうけられる。

「為護応理円実之教父移神

乘鹿而出鹿嶋宮依機法相三

千之学侶和光垂跡而客春日里

千時神護景雲戊申歳矣

本体蘆舎那

久遠成正覚

為渡衆生故

示現大明神

已依聖教及正理

分別唯識性相義

所獲功德施群生

願共速証無上覚」

ここに武甕槌神即ち春日神の法相宗擁護の神としての姿勢が前面にだされている。このように仏教的な思想と神道的な表象が各々に確固とした形で結びついている所に、鹿曼茶羅の原初的な姿があるように思われる。

同じ鎌倉時代の作に宮地家本⁽²⁾がある。この一本は、その作風の優秀さの点で陽明文庫本につぐものである。陽明文庫本の端正な品格の高さと又違った、優美さと愛らしさの相俟った作品である。しかし、図柄から見ると御蓋山を上部におくのは陽明文庫本に習うとしても、神に円鏡をかけ、その中に第四殿の本地仏十一面観音を線描きし、その四方に他の三殿と若宮の本地仏を梵字で表わすなど、陽明文庫本から更に発展した要素をもつ。特に円鏡内の中心が第四殿の本地仏であるというところは、春日神即ち武甕槌神という思想がうすれつつある事実を示しており、注目される。それが、一層顕著に

なるのが静嘉堂文庫本である。この曼荼羅では円鏡内に大きく十一

面観音が描かれている。観音像は細線ではあるが克明に描かれ、像身を金泥、頭髮を群青、蓮華を朱、台座を緑青・群青で彩色している。しかも観音像の後背横に描かれた他の本地仏は、群青の盛り上げ線で描かれ、その後円鏡全面に金箔を押すというやや不鮮明な描写法をとっている。ここに描かれた十一面観音は奈良長谷寺の本尊と同じく右手錫杖、左手執蓮華の像容であり、藤原氏の長谷寺信仰によるものであろう。武甕槌神と結びついていた鹿が鎌倉後期頃には神鹿として独自性をもったことがわかる。その他にも、正木家本のように円鏡内に大日如来の梵字を書く作品などもみられ、武甕槌神以外の神々と結びついて、春日の神鹿としての地位が定まっていたものと思われる。

このように神使として定着した鹿は背に櫛を立てた鞍を安置した姿で春日神全体を象徴するに至った。その顕著な例として三十番神図(図4)をあげることができよう。三十番神図は法華經を守護する神祇三十座の神々を図絵したもので、図柄は類型化したものが多い。その図の中に、三十番神のほとんどが人物化されるのにかかわらず、春日神のみ前述の神籬を乗せた鹿で描かれているのである。また、こうした扱いはMOA美術館蔵の春日曼荼羅図(図5)の中部上方にもみられる。

ただ、武甕槌神と鹿の関係が全く忘れられたわけではなく、第一殿の本地仏不空羂索観音を背にした赤山禪院本や、円鏡内に武甕槌神を描いた根津美術館本などに、それをみることができよう。

(二) 鹿島立御影図

鹿曼荼羅とよく似た図様の作品に鹿島立御影図と呼ばれるものがある。現存する作品は少なく、しかもあまり古い作品は見あたらない。ただ徳川美術館に室町時代の作、春日大社に永徳三年(一三八三)銘の作がそれぞれ残されている。また奈良国立博物館に鹿島立御影図(図7)の複製化した一本が所蔵されている。

鹿島立御影図は、武甕槌神の御蓋山影向の伝説をそのまま図解したものである。武甕槌神が束帯姿で両手に笏をもって鹿に騎乗し、そばに影向の時の供であった中臣時風・秀行が控える構図がとられている。その上方に櫛にかけられた円鏡ないし御蓋山の遠望が描かれるといった形式をとる。そしてその円鏡には春日四座と若宮の本地仏が描かれている例もある。現存の作品が少ないためもあるのか、ほとんど類型化しており、鹿曼荼羅にみる造形の多様性は、この作品群には乏しいといつて良い。

ただ、奈良国立博物館本は例外であり、武甕槌神の他にもう一人の貴人が鹿に乗っている点が、それまでの鹿島立御影図と異なっている。この鹿に騎乗した二人の服装から、乗っている鹿に至るまで相違がほとんどなく、しかもその風貌まで酷似しているのである。ただ袍の色と笏の持ち方だけが異なっている。笏の持ち方からいえば、下方の両手で捧げもつ貴人が、他の鹿島立御影図から推察して武甕槌神であらう。そうすると他の笏を立てその上に片手をのせている貴人は第二殿の齋主命であらう。鹿島、香取から二人揃って影向しようとするところだろうか。残念な事に人物横の短冊形にあった名称はすべて消えているので、以上は推量にすぎない。

鹿島立御影図については、その情景が武甕槌神の鹿島立であるだけに、同じく円鏡内に本地仏を描く例があるとはいへ、仏教の影響をあまり受けていない神道独自のものであるように思われる。鹿曼茶羅のように当時流行した垂迹思想にのりきれず独自の発展ができなかったのではないかと考えられるのである。

しかし、このような思想的背景の差はあっても、鹿曼茶羅と鹿島立御影図とは根源は一つであるように思われる。ただ、成立がどちらが先で、どちらがそれによって派生していったのかは定かではない。

(三) 舍利容器

平安後期から流行した舍利信仰は垂迹思想にまで及んだ。⁽²⁵⁾その頃、垂迹思想の盛時にあたり、本地仏の再考がおこなわれていた。武甕槌神もその例外ではなく、それまでの不空羂索観音以外の本地仏をあてられるようになり、その中で最も有力なのは釈迦であった。舍利信仰と結びついた釈迦説は不空羂索観音説との間に、盛んに論争が行なわれるに至るが、現存の作品の多くが釈迦を描いていることは注目に価しよう。

この第一殿の本地釈迦に対する信仰は高山寺の明恵上人と笠置山の解脱上人によってより発展をみた。明恵上人の信仰の中心は釈迦への憧憬の念であった。おりしも末法思想が流行し、明恵上人は釈迦在世の世に遅れたことを惜しみ、現世に聖教の心を身につけようと修業を続けた。この釈迦憧憬の想いから、明恵上人は何度かインドに渡ろうと企てた。その計画が実行されなかったのは、春日神の託宣があったからという。この時の様子は『春日権現験記』第十

七、八巻と二巻に渡って記されている。

「御房の唐へ御わたりの事ははめてなげかしく侍れば。この事を制したてまつらんがために参たるなり。御房智恵人に勝たるゆへなり。御房を信じたてまつる人をばみな我守護するなり」⁽²⁶⁾とあり、その後も何度か右の託宣を行った女房の口をかりて託宣があり、また芳香などの奇瑞を示し明恵上人のインド渡海をとどめたのである。その後、明恵上人が再び春日神の託宣に従い、解脱上人（貞慶）と対面した折、解脱上人より仏舍利二粒を譲られる。そして、春日社に明恵上人参詣の時、神前にて仏舍利をとりだし、この舍利を釈尊のかたみ、大明神の御身とたのみ奉り、権現の御身この舍利にいりさせ給えと一心に祈請している。⁽²⁷⁾

こうした事から、高山寺では春日神の信仰が盛んとなり「梶尾開帳」といわれる春日、住吉両神像の開帳がおこなわれ、後には「梶尾開帳」が逆に南都へ出開帳するなど、春日社の奥院のような扱いを受けるのである。⁽²⁸⁾そして解脱上人より譲られた舍利のため、毎月十五日に講を修することとし、「十無尽院舍利講式」起草に及んでいる。

この舍利を納めた容器については『高山寺縁起』の三重宝塔の中に見られるが、その形態について何も書かれていない。ただ、この明恵上人の春日神と舍利への信仰が世に広まり、特異な舍利容器を生み出している。それらは舍利厨子と舍利塔に分けられる。先ず舍利厨子についてみていきたい。

ここでとりあげる舍利厨子は春日神鹿の描かれたものであり、いわば春日神鹿舍利厨子と称するものである。それらの舍利厨子の中で最も古いとされるのは不退寺所藏のもので、鎌倉末期から室町初

期に作られたと推定されている。この厨子には前後両面に扉があり、内部のはめ板の両面に鹿に乗った春日神と涅槃図が描かれている。春日神が描かれている図柄は鹿島立御影図に似ているが、随身の二人の姿は描かれず、春日神の手には笏だけでなく経巻を奉持するなどの違いがある。このような厨子内のはめ板に春日神を表わすといった手法は興福寺蔵の舍利厨子(図9)にもみられる。興福寺蔵のものは厨子そのものも春日厨子になり、はめ板には鹿曼茶羅を描いている。この厨子には基壇の底裏に朱漆で銘があり、それによると天文六年（一五三七）の作ということがわかる。

現存の春日神鹿舍利厨子のほとんどは、このように春日厨子に神鹿を描いている。前述の二厨子のように春日神を描くのは異なり、神鹿を舍利容器(図10)にしているものもある。

能満院蔵の舍利厨子の神鹿は金銅半肉となっており、背の円相は舍利が納入できるような形をとって、円相内部に五つの小円相を施し、その中に舍利ではなく春日本地仏の小木像を安置している。また、奈良国立博物館蔵の厨子では春日厨子の中に神鹿を安置している。その神鹿の背には舍利の入った三方火焰の舍利壺をのせている。このような神鹿の背に舍利容器を安置し、鹿自体を舍利容器として造形化している。このような作品に春日大社所蔵の「鹿座の仏(図12)舍利」と呼ばれるものがある。ここでは、神鹿は立たずに瑞雲の上に坐り振り返る姿で表し、円鏡形の舍利器に藤の花をまとわしている。奉納時の文書によって制作年が慶安五年（一六五二）頃とされ、江戸初期まで春日神と舍利の結びついた信仰が連綿として続いていることがわかる。この舍利容器には覆蓋が附属し御蓋山と霊鷲山が蒔絵で施され、明恵上人当時の信仰がそのまま残されていた

ことを示す。

これまでに触れてきたいわば、鹿曼茶羅を立体化したかのような舍利容器とは別に、火焰宝珠形の舍利容器(図13)も残されている。この舍利容器が春日信仰に基づいて作られたことを示すのは、蓮華座上で舍利壺を支える八頭の鹿である。これらの鹿は雌雄交互に配され、雌雄一対としてみれば全体で春日四座を象徴していると考えられる。また舍利壺も下段に四個、上段に一個と配置されているので四座と若宮を示すとも考えられる。

このように舍利容器にまで神鹿の造形が用いられたのは、春日神の標識として鹿がいかに重要であったかを物語るものといえる。春日神の象徴として神鹿が扱われた代表例は、鹿曼茶羅と共に次に述べる御正体であろう。

四 御正体

御正体は鏡の表面に神像、仏像、梵字などを線刻し、礼拝の対象としたものであるが、春日社においてはそれに加えて、鹿曼茶羅を立体化したものも御正体として崇めた。この鹿座御正体の中で最も有名なものは高山寺伝来の「高山めぐり明神」と呼ばれるものである。像高十センチの小振りの作品であるが鹿を青銅で作り、櫛、鞍に鍍金を施し、櫛には純銀の藤の花をからませている。黒塗りの八角形春日厨子に納まり、その上優れた根来塗の唐櫃が外箱として付いている。近衛基通の造立になるという伝承があり、明恵上人由縁の品である。この御正体の厨子と共に唐櫃の中に明恵上人弟子仁真の手になる添状がある。それによると、弘安四年（一二八二）に明恵上人念持のこの厨子と一諸に上人の遺品を納めたとある。添状の

裏書によると、その後も嘉元元年、建武三年、歴應二年と何度かに渡って、この唐櫃にいくつかの品物が追納されている。⁽³⁰⁾この事から、この御正体が高山寺全体の深い崇拜を受けていたと思われる。このような鹿座御正体には他に一点個人蔵の作品がある。こちらは高山寺伝来の御正体が円鏡内に何も描かないのとは異なり、本地仏を毛彫りしている。また第一殿の本地仏が不空羂索観音でも、釈迦如来でもなく阿弥陀であることが注目される。第一殿の本地仏は他にも不動明王、観音などの場吟があるが、阿弥陀が表現されるのは非常にまれである。

(五) 彫刻

神鹿の造形として彫刻はごく少なく、管見の限りでは二例のみである。その二例は全く異なった性格をもつ。

その一つは春日日本像である。ただし、この本地仏は第一殿ではなく第三殿の本地地蔵菩薩である。基台の裏に「毎日晨朝入諸定入諸地獄令離苦 无仏世界度衆生 今世後世能引導」「春日大明神三宮 御地蔵垂跡云 則当所明神也」とあり、光背にも「南無地蔵菩薩 南無春日大明神」と墨書されている。この第三殿の本地地蔵菩薩には、春日野の地下に地獄があり御蓋山に浄土があるという信仰があり、それによって世に広まった。⁽³¹⁾この為、中世以降春日神すなわち地蔵菩薩とされることがあったようである。

今一つの彫刻の作例は高山寺の神鹿一対である。この一対の鹿は狛犬としての性格をもっているらしく、『栴尾大明神御開帳記』に春日、住吉両神像の厨子前に配置されている妻鹿男鹿に相当すると

ある。⁽³²⁾ここに祀られている春日神はさきのような第一殿、第三殿の神像、本地仏といった形をとっていない。

『春日権現験記』によると明恵上人は、

「其後御形像の事なを祈請のために。春日詣を思たちて。廿二日国をたゞんとする程に。廿二日さきの女房れいのやうにして。大明神おりさせたまひける。しきりにわが影像の事をたづねしめたまへば。其事申さんために来なりとてくはしくしめしたまひけり⁽³³⁾」

とある。その後仏師俊賀を紀州へともない、保田庄星尾で、春日・住吉両神の画像を描かせたと『春日明神託宣記』にみられる。⁽³⁴⁾明恵上人はこの両神像を自らの守本尊として深く崇拜し、そのため紀州有田山中に寺を建立し、その境内に春日、住吉の社殿を創立して、そこにこの神像を納めようと勸進をおこしている。その後、高山寺に帰った折にも両神像は常に彼の座右にあり、明恵上人没後、東経蔵内に掲げられたという。後世に、この東経蔵から石水院に移され近世に至るまで栴尾開帳の本尊として、広く信仰されるに至った。

神鹿はこの石水院指図の中に配されているが、作風からすれば、東経蔵内に両神像が奉掲された文暦二年（一二三五）頃に造られ、石水院に両画像と共に移されたと推定される。⁽³⁵⁾

この画像は失なわれているが、現在高山寺に所蔵されている何点かの春日神像の形像がほぼ共通している事から、当初の様子をしのぶことができる。これらはいずれも袈裟をまとい両手を衣の中で組むかもしくは合掌してあごひげを有する中年の男性像である。この姿はそれまで衣冠束帯姿で表わされてきた神像と異なり、春日四座、若宮の形像に見られないものである。明恵上人が感得した春日

神とはこのように、武甕槌神以下の神々のうちの特定の神をさすといったものではなく、春日神として春日四座と若官をあらわすものであったのがわかる。前述の春日神すなわち武甕槌神という考え方や、地藏菩薩をさすという説とは別に、春日神がそれ自体一柱の神としても考えられるようになったのが以上の事からあきらかになるう。

そうした中で神使としての鹿はその地位を固めていった。春日宝珠(圖16)にみられる第四殿の姫神と若神を背にした神鹿や春日日本地像のように、春日神の性格をどのような姿にもとめようと、そのかたわらに鹿の姿をあらわしている。このように当初武甕槌神との結びつきによって神使であった鹿は、春日社全体の象徴として崇拜を受けるに至ったのである。

三 春日信仰と鹿

以上見てきたように春日信仰の中で神鹿がはたす役割は非常に大きい。従来の神鹿について述べられた中には、鹿は神使として春日神を象徴し、人々は鹿に實際あう事自体を春日神の神慮にかなうものとみなし、鹿そのものが信仰の対象になったとする見方がある。(36) たしかに平安末期に至っては、前述したように春日詣の時公家が最初に逢った鹿を拝したり、鹿の殺生禁断の制札がたてられたことからわかるように、いかにも信仰の対象になったような観もある。しかし、これらは信仰の対象というよりは、春日神の神威絶大のため神使としての鹿が大切に保護されたとみるのが妥当と思われる。

造形作品の上からいえば、鹿曼荼羅や三十番神図、その他の作品にみる鹿には共通するところがある。たとえば、全ての鹿には神木

たる榊に春日神を表わす梵字か本地仏の描かれた円鏡を立てており、鹿島立御影図に至ってはその背に武甕槌神をのせている。つまり円鏡、神籬や武甕槌神に対して鹿は獣座として扱われているわけである。鹿島より影向の伝承が獣座として大きな意味を鹿に与えたため、春日神の標識として大きくとりあげられるようになったのに相違ない。

何故、影向の伝承が他をさしおいて神鹿に台座の地位を与えたのだろうか。春日社の祭祇に従ってそれを考えてみたい。尚、祭祇については西田長男氏の「春日大社の創立」に、エリアーデに抛りながらほぼ次のように述べられている。

祭とは、当然ながら神社、神道における我国固有の風儀であるが、同時に世界に普遍的なものである。ハンガリーの人類学者ミルチャ・エリアーデによると、ある実在の「最初の顕現」にはその実在の創造と同一視されるものが、あり規範的な価値がある。そのため、起源の時を再発見するには人々は神々の創造行為を反復しなげればならないとされている。祭とはこの起源の時（原初の時・太初の時・創造の時・そのはじめ・そのかみ）へ回帰する事である。エリアーデのこの定義は日本においても妥当なものであると西田氏はみている。(37) つまり、その神社における神の最初の行動を再現するということにおいて、祭は一種の聖劇になるとみてよいのであろう。翻って、春日社において起源の時とは鹿島からの影向に他ならぬ。

『春日社私記』をみると、

「同年十二月七日、大和国城山安部山(マコ)に御坐。同二年正月九日、同国添上郡三笠山移御す。その時、かせきにめされたりけりと申

つたへたり。かの時の鞍は、当時も二季の御祭日、社庫より正頂いたしたてまつるとかや。⁽³⁸⁾

とあって、春秋の例祭には影向の時鹿島神が使ったといわれる鞍を社庫より出している。祭において、神の起源の時をそのまま再現する「神のまねび」といわれる宗教的行為に、この鞍が用いられたか、または象徴として安置されたものと思われる。

このように、「神のまねび」が春日社にあっては鹿島よりの影向であったのならば、春日社において鹿島影向は大きな意義を有していたのである。そのため春日神を安置する台座は鹿座でなくてはならなかった。そして、それ故に人々は鹿をみると、その背に騎乗する目に見えぬ春日神を想定し、礼拝したのではなかったのだろうか。もし鹿が春日神の権化として用いられたことがあったのならば、それについて何らかの記載が残っていると考えるのが妥当であろう。『春日権現験記』に何箇所か、鹿の記載はあっても、それが春日神の化身したものと描かれていない。他の文献でも春日神は動物に化身したという記載は見あたらず、人間の姿で顯れるのは、建『久御巡礼記』中の人夫に交った翁を始め、藤田美術館蔵の「春日明神影向図」の把笏束帯の姿に見られるところである。

これらのことより筆者は鹿はあくまでも神使であり、春日神の乗り物という性格を出ないものとみたい。

鹿曼茶羅はその内に色々な思想の変遷を含みつつ、様々な形をかえていく。その変遷の中にあつて神使としての鹿の本質を考えていきたいというのが本稿の主旨であつた。筆者が今後、鹿曼茶羅を研究するための基礎的視角はひとまず示し得たと思うが、浅考の箇所や考え違いについては諸先輩方の叱責をまつものである。

〈註〉

- 1 時風記文について本書を調査された西田長男氏によると、著作年代・著者ともに、ほとんどその歴史的信憑性はない。しかしながら、鎌倉時代中華の文暦年間をそう降らない頃に、春日大社内部で唱道されていた社記・縁起の所説の一つであつた事は確実であるとしている。筆者もその立場に依つてこの記文を引用するものである。西田長男「春日大社の創立―文献資料を中心として―」(『日本神道史研究』第九巻、神社編(下)、講談社、一九七九年)、一七頁。
- 2 倉野憲司校注『古事記』(日本古典文学大系一、岩波書店、一九八四年)、二一九頁。
- 3 武甕槌神は『日本書紀』の表記であり、『古中記』では建御雷神となつている。武甕槌神は『日本書紀』によると伊弉諾尊の十握劍より生まれた速日神の子孫であり、その表記から刀劍の神である事がわかる。又雷神であることは、刀劍の打つ折に出る火花から連想されたく、雷神すなわち刀劍の神という関連性は名に甕(御殿、雷)の字がついた神々に共通している。
- 4 倉野校注、前掲書、二九頁。
- 5 秋本吉郎校注『風土記』(日本古典文学大系二、岩波書店、一九八四年)、七〇～二頁。
- 6 秋本校注、前掲書、四四頁。
- 7 藪田嘉一郎「春日鹿曼茶羅」(『神道及び神道史』第四号、特輯神道美術、国学院大学神道史学会、一九五七年)、一三頁。
- 8 藤田経世編『建久御巡礼記』(校刊美術史料、寺院篇上、中央公論美術出版、一九七二年)、一三三頁。
- 9 天兒屋根命が中臣氏の祖神だということは井上光貞他校注『日本書紀上』(日本古典文学大系六七、岩波書店、一九七六年)、一三三頁にみられ、枚岡神社については武田祐吉校注『祝詞』(日本古典文学大系一、

岩波書店、一九八四年)、三九四頁にある。

- 10 宮地直一「春日神社の研究」(『宮地直一論集』第四卷、蒼洋社、一九八五年)、四頁以下。

11 秋本校注、前掲書、六八頁。

- 松村博司校注『大鏡』(日本古典文学大系二、岩波書店、一九八四年)、二二七頁。

12 宮地、前掲論文、六頁。

13 宮地、前掲論文、八頁。

14 西田、前掲論文、二二頁。

15 宮地、前掲論文、一四頁。

16 松村校注、前掲書、二二三頁。

- 17 宮地直一「神社の崇敬」(『宮地直一論集』第五卷、蒼洋社、一九八五年)、二九五頁。

18 『春日権現験記』(群書類従 第二輯、続群書類従完成会、一九七七年)、四一頁。以下本資料による引用の際には、当群書類従の頁数による。

19 宮地、前掲「神社の崇敬」、二九六頁。

20 藤田編、前掲書、一三五～六頁。

- 21 藤田編『七大寺巡礼私記』(校刊美術史料、寺院篇上、中央公論美術出版、一九七二年)、五〇頁。

22 高橋美由紀「藤原氏の春日信仰における神事と仏事の關係について―玉葉の春日神事記事を中心として―」(『日本文化研究所研究報告』第一二集、東北大学日本文化研究所、一九七六年)、五一頁。

23 藤田編、前掲『七大寺巡礼私記』、五〇～一頁。

24 前掲『春日権現験記』、一二頁。

25 景山春樹『神道の美術』、塙書房、一九七六年、六七～七四頁。

26 前掲『春日権現験記』、四八頁。

27 景山春樹「高山寺の春日、住吉明神像―梅尾の鎮守社とその遺宝―」(『美術史』七号、一九五二年)、八八頁。

28 景山、前掲「高山寺の春日、住吉明神像」、八八頁。

29 景山、前掲「高山寺の春日、住吉明神像」、九六頁。

30 景山、前掲「高山寺の春日、住吉明神像」、九六～七頁。

31 景山、前掲「神道の美術」、一二九～一三四頁。

32 東京国立博物館編『特別展 鎌倉時代の彫刻』(一九七五年)、三二四。

33 前掲『春日権現験記』、五一～二頁。

34 田中久夫『明恵』(人物叢書六〇)、吉川弘文館、一九六四年)、六七頁。

35 景山、前掲「高山寺の春日、住吉明神像」、八十七頁。

36 宮地、前掲「神社の崇拜」、二九六頁。

37 西田、前掲論文、五七頁～六四頁。ちなみに西田氏が典拠としたエリアーデの文獻は、

Mircea Eliade, *Das Heilige und das Profane, Vom Wesen des Religiösen*, Hamburg, 1957.

38 西田、前掲論文、二六頁。

〔付記〕

本稿脱稿後、上田正昭編『春日明神』(筑摩書房)が刊行された。本稿の議論と直接関わる部分もあるので、あわせて参照されたい。

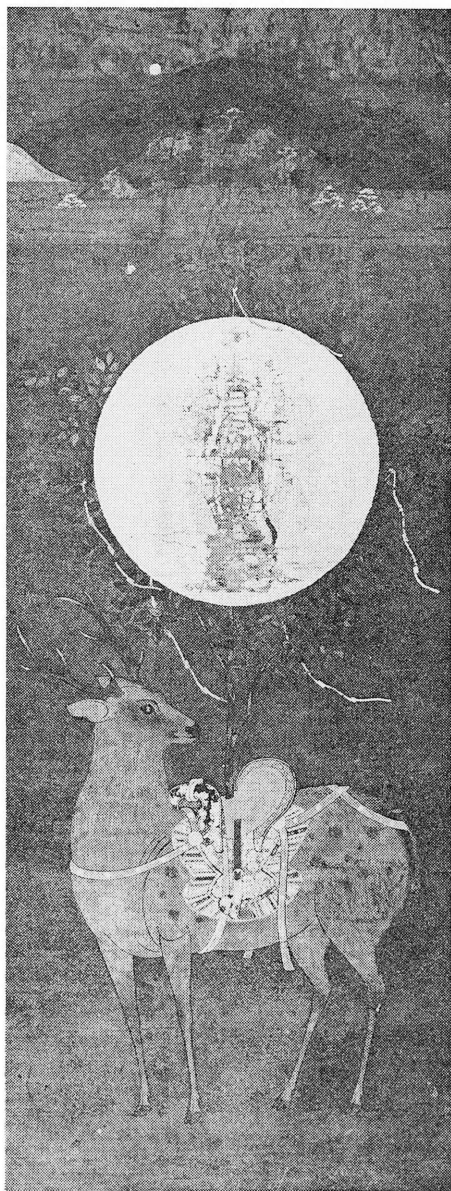


図3 重文 美日鹿曼茶羅図
東京 静嘉堂文庫

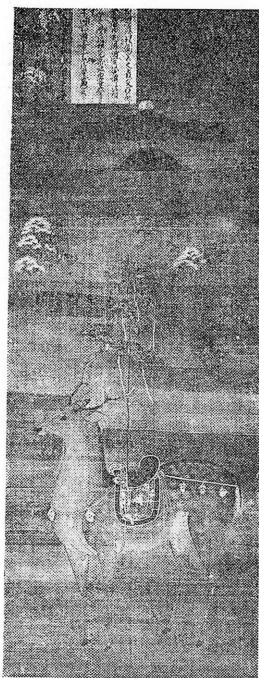


図1 重文 春日鹿曼茶羅図
京都 陽明文庫



図2 重美 春日鹿曼茶羅図



図6 春日曼荼羅図 京都 赤山禪院



図4 三十番神画像(部分) 奈良 談山神社



図7 鹿島立御影図 奈良国立博物館

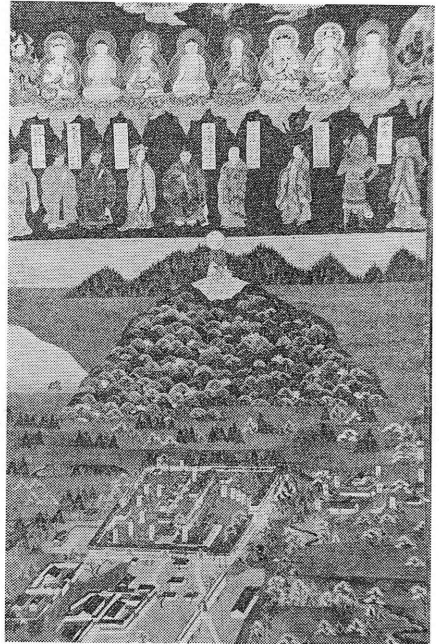


図5 春日曼荼羅図 静岡 MOA美術館

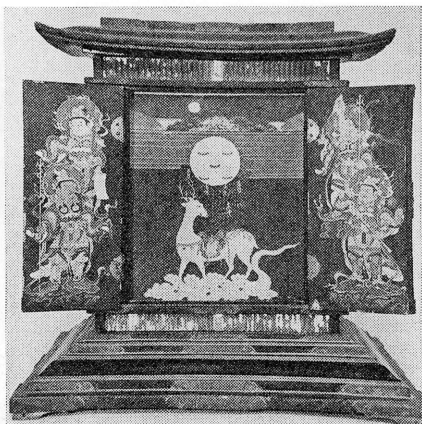


图9 春日神鹿等舍利厨子
奈良 興福寺



图8 重文 春日明神等舍利厨子
奈良 不退寺

图11 春日神鹿舍利厨子 奈良国立博物館

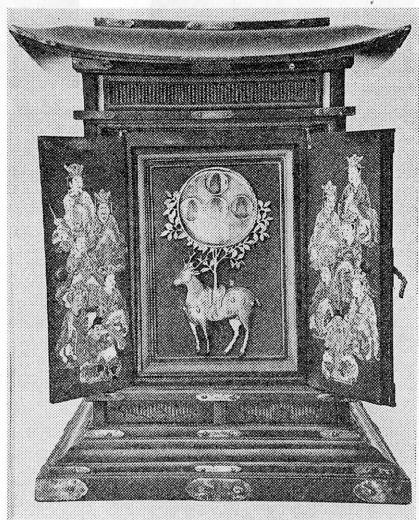
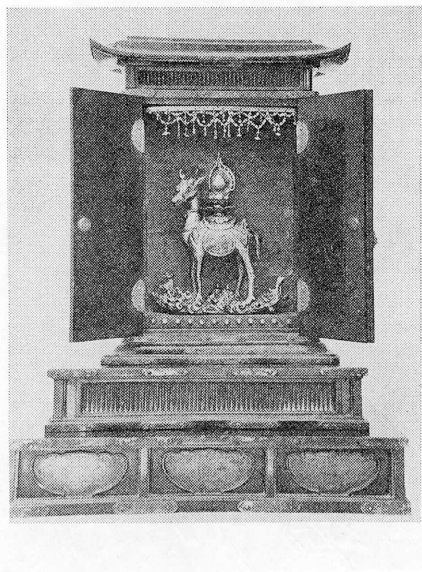


图10 春日神鹿等舍利厨子
桜井市 能満院

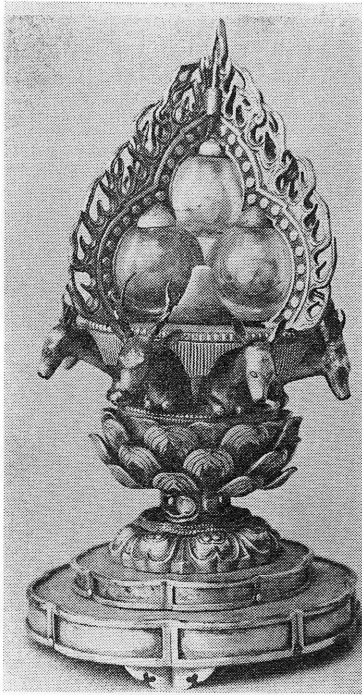


图13
春日神鹿舍利塔

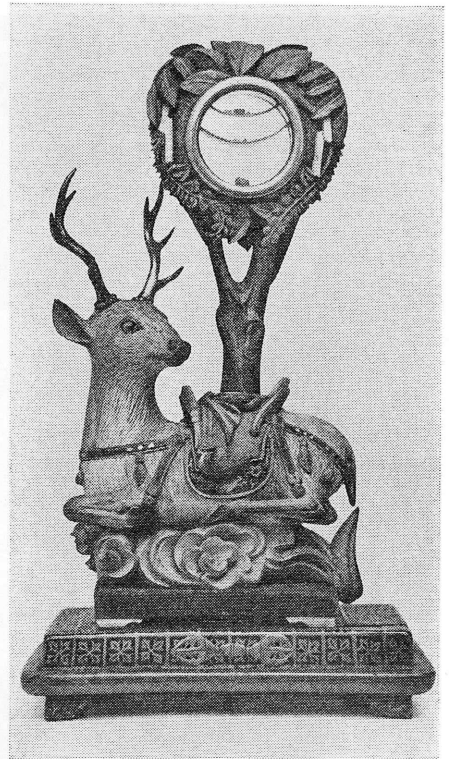
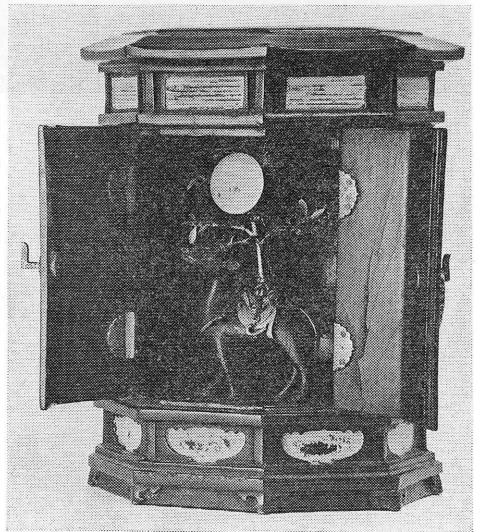


图12 春日神鹿舍利塔 奈良 春日大社



图15
春日本地像

图14
重美
春日鹿座御正体厨子



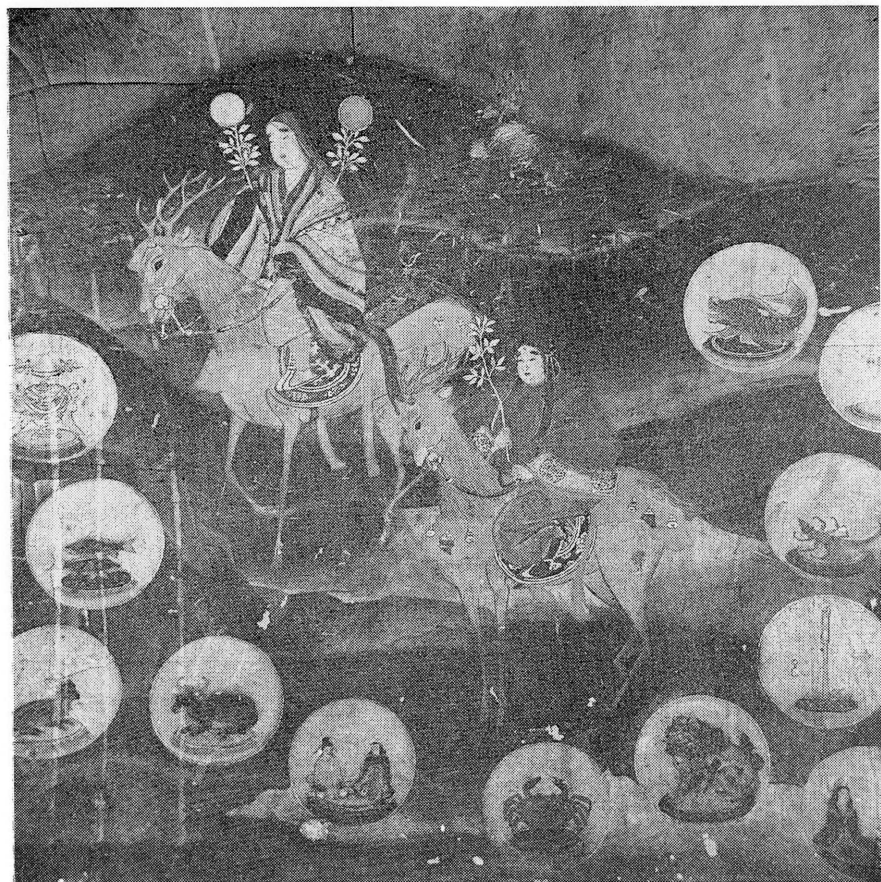


图16 春日宝珠宫（外宫侧面）